

### 別稿その3、le Nom-du-Père と les Noms-du-Père について

本稿はセミナー 22 巻、R.S.I.全般および同 23 巻、le Sinthome を見据えて認めたものである。デテールについてはその都度アップしているものが参考となるであろうが、ここら辺で全体を概観するものも必要ではないかと判じ認めた。

「父親」、「父と子」の問題は、家庭内の問題、宗教上の問題を越え出て行くものであるし、精神分析(的なもの)の存亡にも関わるものともいえる。一方で伝統的な父親的權威の失墜に対し反動的に増長してきているのが、nomination imaginaire である。この点については、仄めかし程度に止めておいたが、あらゆる組織において支配的になりつつある傾向であるし、少なくともラカンはそう予見していたのである。

今後もイレギュラーにはあるが、別稿を折に触れアップしてゆく。